

人間情報科学科 教育システム開発論研究室

井上 典之



教育システム開発論とは

現代を生きる我々は多くの情報に囲まれながら暮らしている。しかしながらどのような情報に囲まれようとも「情報」はそのままでは単なる情報でしかなく、それが「意味」になって初めて個人の学びや成長に重要な役割を果たしていくと考えられる。本研究室では「教育」がそのようなプロセスに大きな役割を果たすものであると捉え、人間の学び・成長を真に促進することのできる教育システムのあり方や、様々な社会的課題の解決に貢献できる教育システムの開発・改善プロセスなどについての研究を行なっている。ここでいう教育とは、学校教育や大学教育などのオーソドックスなコンテキストにおける教育に限らず、企業における人材教育やリーダーシップ教育、コミュニティにおけるグローバル・多文化教育などの広義な教育もその中に含まれる。

近年の教育研究においては教育はシステムとして機能し、そのシステムの様々なコンポーネントがダイナミックに相互作用することで教育は教育として成立していると考えられている。例えば教育は教え手、学び手だけではなく、教育方法、道具（テクノロジー）、カリキュラム、評価、組織・リーダーシップ、社会的・文化的基盤など様々な要素がダイナミックに関わり合い、そのシステム独自の複雑性を内包しながら成立していると考えられる（図1）。したがってそのシステムの中の特定の要素のみに視野を限って研究を行うことは、まさに「木を見て森を見ない」近視眼的アプローチであるといえよう。すなわちどのような教育の実践・イノベーションの研究においても、その全体性と複雑

なダイナミックス、その独自性を鑑みながら研究活動を行なうことが重要になってくるのである。

私は米国の大学で教育心理学の博士号（Ph.D.）を修めた際に多様な学問的アプローチの必要性を学んだのであるが、以上のような視点による研究は日本においても教育心理学という一分野を超えて社会学、認知科学、人類学、哲学、神経科学のような学問をも巻き込んだ学融的アプローチを必要とすると同時に、現代社会における「学問」の意味を再定義していくものと考えている。

アクション・リサーチ

欧米の教育研究においては、アカデミズムや科学の名のもとに現実の教育実践の改善にはあまり有用ではないような知識しか提供して来られなかった今までの伝統的な教育研究のあり方は、理論と実践の乖離という観点から大きな批判に晒されてきた。しかしながら近年の欧米の教育研究においては、研究者が教育実践の現場に入り、そこで実践者と協働したり学び合いを行ったりする中で現実の教育実践における課題を実践者と共に考え解決して行く探索的・協働的なアプローチこそが教育研究のあるべき姿だと考えられるようになって来た。

本研究室でも以上のような観点から教育実践のフィールドとのコラボレーションを積極的に行なっており、近隣の小中学校や教育を専門とするNGOなどにおいてゼミ生が定期的にフィールドワークやボランティア活動を行うことでそのフィールドの内側から教育実践を理解する視点を培い、そこでの学びをベースに探索的に教育システム開発の研究を行うことを推奨している。

それらの研究においてはアクション・リサーチ（AR）を方法論的なフレームワークとして位置付けて研究活動を行なっている。ARは20世紀中盤にKurt Lewinによって最初に理論化された方法論であるが、教育においては教育実践の内側にいる教え手がアクション・リサーチャーとして、あるいは外部の研究者と協働的に実践の内側で教育実践のニーズをホリスティックに捉えながらアクション・リフレクションのサイクルを回すことによって教育実践の改善を実現していく。これは教育だけでなく様々な分野での実践改善を成功させるための一つの「型（カタ）」とも捉えることができ、プロフェッショナルなフィールドにおける実

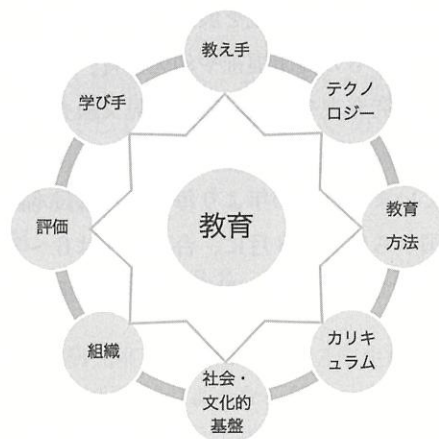


図1：教育をシステムとして捉える

研究室だより

践の開発・改善を実現させるための非常に有効なアプローチだと考えられる。実際に教育の現場でのAR的な考え方をベースにしたフィールドワークは本研究室のゼミに在籍する学生にとって大きな学びをもたらし、卒業後の進路で活躍するための自信につながる活動となっている。

グローバルな視点での教育研究

現代社会に存在する教育の課題はその基盤となる文化の価値観や社会・経済的な側面に制約されており、その意味において教育は文化的な活動であるといえることができる。したがって教育の文化的な次元にメスをいれることなしには教育研究は表層的なものにならざるを得ないといえる。すなわち教育システム研究においては研究者・教育実践者はその社会・文化的なコンテキストにおける教育の複雑性を理解し、その開発・改善のプロセスの中で自らの文化的想定や世界観を吟味しそれを超えて行くことが要求される。そこではグローバルなコラボレーションやアイデアの交流から多様な考え方や視点を培いながら、自らの世界観や想定への制約・限界を超えて行く姿勢が必要となってくるのである。

私はアメリカの大学で長年教鞭をとった後2017年に人間科学学術院に赴任して来たのであるが、その経緯もあって本研究室では最新の教育の課題についての海外の研究文献を購読したり海外の研究者との対話やコラボレーションを積極的に行っており、そこから日本という文化的コンテキストだけに制約されない多様な思考や視点に裏付けされた研究活動を行うことを目指している。そのようにグローバルな視点で教育研究を行うことは、複雑な教育の課題を解決して行くために大きな意義を持つことであると考えている。

研究室活動の例

本研究室では、以上のような考え方をベースにして様々な研究活動を行なっている。例えば現在は米国のセサミ・ワークショップが製作している「セサミ・ストリート」とのコラボレーションのプロジェクトとして埼玉県の小学校の総合の時間で行われている子ども達の全人的な成長やエンパワーメントを実現させていくための取り組みの評価研究を行っている。また、関東圏の一連の小学校に出向いてエキスパートの教師がいかに児童の学習意欲、自律性、有能感、関係性のような非認知能力を教科教育の中で促進しているかを調べ、そこから国際的な授業研究プロジェクトを開発・発展していくための取り組みを行なっている。その他にも小学校や中学校におけるコミュニケーション力を重視した英語教育や、学習者の内的動機や主体性を促進するための学習サポート、リーダーシップ教育やキャリア

教育のあり方についてなど、様々な研究活動が常に同時並行的に行なわれている。

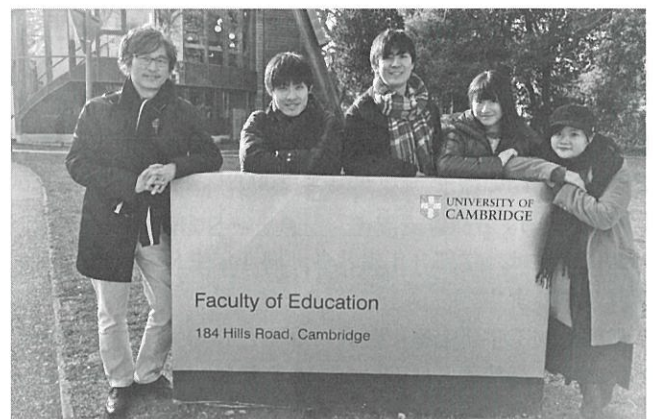
これらの研究活動ではゼミ生が縦横に活躍すると同時にその経験をベースにして自らの卒業研究を自由で独創的な発想でデザインし、個々の研究を主体的に進めている。毎週のゼミの時間には教育心理学、認知科学、教師の専門技能などについての国内外の文献購読を行うと同時に、上で述べたようなフィールドワークや研究活動から得られた知見をお互いにシェアし、そこから人を教えることの本質や真に人を育てることのできる教育システムのあり方についてのディスカッションを行なっている。また常に新たな教育実践・イノベーションを研究するフィールドの開拓を行うと同時に、海外の研究者と連絡を取り合いながら新たな国際的なコラボレーションをスタートさせるための模索を行なっている。

以上のような研究活動を進める中でゼミ生が成長し、新しい時代を生き抜くためのたくましさや柔軟さを獲得していくのを見るのは楽しく、頼もしいものである。本研究室についてのさらに詳しい情報や最近の活動については、以下のウェブサイトを参照されたい。

<https://ninouehomepage.wixsite.com/main>



サンディエゴ大学とのAR研究発表会



ケンブリッジ大学での教育研究研修